

平成22年 5月 25日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19510253

研究課題名（和文）：マレー境域世界におけるタイ仏教徒コミュニティの研究

研究課題名（英文）：A Study of Thai Buddhist Communities in Thai-Malay Trans-Border area

研究代表者

黒田 景子 (KURODA KEIKO)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：20253916

研究成果の概要（和文）：本研究は、マレーシアのクダー州に所在する44のタイ上座仏教寺院を調査対象とした。調査と考察の結果、クダー州においては、Bukit と呼ばれる内地の標高15-100mの地域に16世紀から20世紀初頭にかけて、タイ南部から農民が移住してきて多数の寺院と村落を作っている。彼らはタイ国籍者と区別するために、自らをシャム人と呼び、マレーシアの先住民（ブミプトラ）であることを意識している。古い村落はクダーの河川交通の主流であったクダー川とムダ川沿いに存在している。1950年代にはNewVillage政策によってタイ国境近くの村落は強制移住を余儀なくされ、その結果、コミュニティが崩壊した場合もある。シャム人人口は過去50年の間に徐々に減少し、過疎化も進んでいるが、シャム人村落が大きなところでは寺はコミュニティの中心、タイ語教育の中心であり、タイ国からの僧侶や建築支援を受けてこの20年の間に施設が充実しつつある。また、都市部に近くシャム人が少ないところでは、クダーやペナンの華人が寺を支え、納骨堂や華人的立像などを寄付するなど華人化が進行している。シャム村落の分布を調べると、19世紀以前のクダーのマレー政権が沿岸部を領域の中心とみなし、内地に関してはほとんど政治的関心を持っていなかった可能性がわかった。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to clarify approval and the history of Thai Buddhist temples in State of Kedah in Malaysia. As a result of the investigation and consideration, in Kedah, forty-four Buddhist temples and more villages are made in the region of above sea level 15-100m in the inland that is called "Bukit". Most of them are rice farmers migrated from Southern Thai from the 16th century to the early 20th century. They call oneself Siamese to distinguish from the Thai nationality person, and consider native people (Bumiputra) in Malaysia. Several old villages exist in the banks of the Kedah River and the Muda River that is the main current of the river traffic of Kedah.

The forced migration is done through necessity by the New Village policy as for the village in the vicinity of a Thai border in the 1950's, and, as a result, a few communities have collapsed.

The Siamese population will decrease gradually in the past 50 years, and depopulation is also advanced.

The temples are the centers of the community, the center of a Thai education in the places where the Siamese villages are big, and priests and architectural support from a Thai country are received and facilities were enhanced in these 20 years.

Moreover, Chinese who live at urban area in Kedah and Penang support the temples, and contributing an ossuary and a Chinese descent statue, etc. In some temples, we can see a kind of strong influences of Chinese culture.

From the distribution of a Siamese village, Malay political power of Kedah before the 19th century had considered the coast part to be a center of the area, while it seems hardly to have had the political concern for the rule of the inland area.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度			
2006年度			
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：タイ / マイノリティ / マレーシア / 上座仏教 / 境域

1. 研究開始当初の背景

マレーシアの近代以前の歴史的研究においては、信頼するに足る歴史資料が少なく、王朝史に記載されない地域村落の状況や歴史、また、タイの朝貢国であったといわれるクダーの実際のタイの影響については、ほとんど調査がなされなかった。マレーシアにおいてはタイ系住民は先住民ではありながら社会的にマイノリティであり、その存在が知られてはいるものの、広い視野で彼らの社会的影響力や歴史についての関心は低く、彼ら自身の語りにも情報価値も認められていなかった。一方、マレーシアとタイの国

境地域、文化的に双方が影響し合い、共存するクダーという境域の特性は、仏教と対立しがちなタイ南部の東海岸のパタニの状況と極めて興味深い対立的な存在であった。なぜこのような境域でこのような文化的差異が生まれたのか。当地住民の歴史的認識と、多民族多文化共存の可能性について興味深い謎であり、境域の世界をどう認識するのかがテーマとなった。

2. 研究の目的

1) 従来の歴史資料の補完的歴史資料の入手とオーラルヒストリーによる村落史の収集と再構成によ

って、鳥瞰的に境域を眺め、あらたな視野から境域の歴史認識、領域認識を得ること。

2)現在のタイ系住民とその上座仏教寺院との繋がりを観察し、さまざまな視野から彼らの置かれている状況を調査し、その後の定点観測的研究の素地として情報のデータベース化を計ること。

### 3. 研究の方法

当初、研究対象地域として南タイのプーケットやハジャイなどのタイ国内をも含んでいたが、タイ国内の治安状況を考え、まずはマレーシアのクダーの状況をまず詳しく調べることを3年間の目的に変更した。

歴史資料を補い、現地村落のタイ系住民とタイ文化の影響を調べるためには、タイ系村落に必ずといって存在するタイ上座仏教寺院の全寺院調査を行う必要がある。タイ寺院はクダー州内に44寺、ペナン州に4寺あるとの情報により、全寺の調査を慣行した。方法は聞き取り調査と、GPSによる位置情報や地形観察による。定点観測のフィールドワークではないために、レンタカーによる広域調査的な手法を合わせて地域全体の情報を集めた。全村落、全寺を網羅するだけで3年の期間を擁した。

### 4. 研究成果

- 1)対象地のタイ寺院は、当初のリスト外になお、増加しつつある。
- 2)その反面、タイ系住民は農村の過疎化により人口が減少傾向にある。
- 3)伝承から16世紀から19世紀にかけて南タイより移住してきたことが推察できた。
- 4)タイ系住民の移住地はブキットと呼ばれる標高15-60mの地で、水田の開拓方法が、いわゆるNaと呼ばれるタイの重力灌漑方式の水田である。これは、沿岸部のマレー人水田地域の洪水型天水田とは異なるものである。農学的調査についてはまだ、より詳しい調査が必要である。

- 5)クダー州は2000-2010年にかけて旧来の道路の大型改修を行い、そのため政治的弱者であるタイ系住民の住む地域に大型道路の建設が進み、伝統的景観が変化しつつある。タイ系住民や寺の盛衰もその影響をかなり受けていることが分かった。
- 6)一方、タイ系住民の少ない都市部、あるいは、中国系仏教寺院をもたないマレーシアの中国系仏教徒にとってはタイ寺院は仏教徒として参拝の対象であり、また納骨堂などを寄付して、中華系の企業や個人からの寄付がタイ寺院をも支えている。むしろ、華人的立像などが増加しつつある寺院もみられる。
- 7)クダーとよばれるマレーイスラム王国の伝統的な領地は、現在の国境州境とは異なる形をもっていると推察される。それは大多数であるマレー系住民の主たる居住地である沿岸部の人口集中に比して、現地で「丘陵(ブキット)」と呼ばれる内陸部の住民にはマレー政権の影響がそれほど及ばなかったのではないかという仮定である。ブキットの住民は、南タイからの移住者、すなわち、タイ系住民とサムサムともよばれるタイ語話者マレー系住民であり、ブキット自体が1930年代まで無法地帯とみなされていたからである。これによって、地図での視覚的な思い込みとは異なり、マレー半島中部を縦断する丘陵地域にタイ系文化がかなり南下していたことも仮定できる。これは、タイ王権とマレー王権の歴史資料のみにみる歴史認識を従来とは異なる解釈でみることである。また、マレー半島の東海岸と西海岸の文化的な差異を説明できる説である。

以上の成果は一部を寺院のデータベース的解説論文として発表中であり、また、一部はさらに考察を深めた論文として執筆中である。なお、継続した調査も必要である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①黒田景子「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院: 寺院調査から (1)『人文学科論集』

鹿児島大学法文学部紀要、第 71 号 (2010 年  
2 月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 景子 (KURODA KEIKO)  
鹿児島大学・法文学部・教授  
研究者番号：20253916

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

(なし)